

編集デスク =1=

松阪の講演会に出席して

長谷川 泉

台風模様の過日、松阪で開かれた三重県保助看護連絡協議会結成大会の特別講演に招かれて一席おしやべりをした。風雨をおして会場の松阪公会堂に集まった、県下の保助看護の人たちの熱心な顔に心打たれたが、会場で感心したことがある。

それは来賓の人たちが、お座なりの祝辞ではなく、心からこの結成大会を喜び、その誕生を祝福し、今後その成長を見守つてゆくという気持がこもった祝辞を呈していたことである。日曜日ではあるが、まず田中覚知事がかけつけて心あたまる祝辞を述べた。このような会によくありがちな、代読といったようなことが一人もなく、皆それぞれに個性のにじみ出た、その人なりの祝辞が呈されていた。

他の府県であれば、このような場

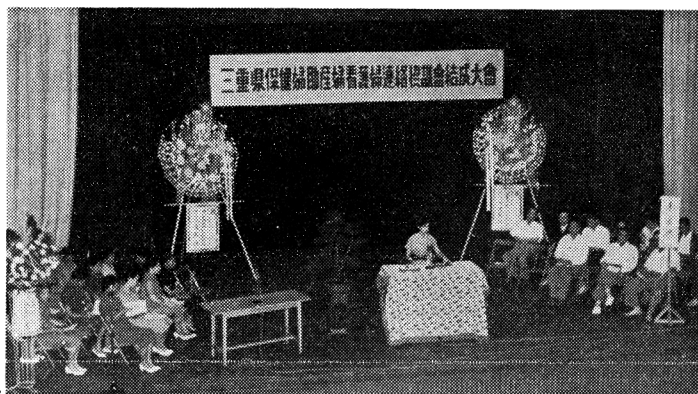
合に知事の祝辞はたいがい代読ですましてしまうであろう。その意味で田中知事の肉声の祝辞はこの県の今後の看護界の大きな力づけになるであろう。田中知事を引き出した阪巻衛生部長や、中医務課長、山田看護係長は、まずスタートにおいて力強い侵透力を持つ PR の実をあげた。

看護係長の山田里津さんは結成大会の準備委員長としての大役を果たした。今後は鈴木光会長の手もとで運営されてゆく。結成大会が終わつて、知事を囲んでの懇談の折に感じたことだが、行政の中心になる人たちが、私のようにほかから入り込ん

だ者の前でも、ザックバランな話をして壁がない。これはよいことだ。

私は「ナースの人間関係」という講演をしたのだが、この結成大会の雰囲気を見ていると、特別に理論だった人間関係のレクチャーなどは不要なくらいに、生きた人間関係の理解と実践が、進んでいるように思えた。これでは「講師不要」というわけである。私は 2 時間近くもおしやべりはして来たが、実は尻尾を巻いて帰つてもよかつたわけだ。これはだが、講師にとつては嬉しいことである。(筆者・医学書院編集部長)

〔写真：山田準備委員長の経過報告〕



そこへもってきて、いまの青年たちは、私たち年配者のような享楽罪惡感をもっていない。そこで、私たちはヒヤヒヤしてしまうのだ。しかし、考えてみれば、そこから私たちの過敏さ故の過大視を減じ、むかしは蔭でコッソリ楽しんだのを彼らが堂々とやっていることをも計算に入れば、さほどのものではないのかも知れない。私たち自身が、なぜ人生を楽しむことを“罪”と感じ、うしろめたい思いをする習慣がついたのかを、この際反省してみることが必要ではないだろうか？ これも、おそらくは身分社会の固い枠がのこした歪みなのだ。“分をすぎた”楽しみは、当時、罪であった。しかし、いま“分”とは何だろうか？

“修学中”なのに、といわれるかもしれない。けれど、幸福を使わないで貯金(?)しておけば、やがて利子がついてもどってくるなどという神話は、私たち自身、もう信じてはいない。だから、セツナ主義がよいというのではない。ただ、空し

く将来のために現在を犠牲にするだけが、人間としての道だという主張をするのは無理なのではないかと思うのだ。“必ずむくいられる”などという甘ったれた夢よりは、もっと合理的な計画性をこそ、青年たちの中に育てなければならない。しかし、それを育てるためには、私たちももういちど自分が情性に流されてはいないか、彼らといっしょに考え直さなければならない。

以上のべたところが、はなはだ散文的で非人情なものであることは、私も知っている。しかし、ピンボケ写真を“芸術的”だといいくるめるような“趣き”に、私は反対したいのである。ものの通じぬところを、腹芸でごまかすような“人情”は、いまは通用しない。いちおうピチンと割り切れるところを見つめた上で、その上に、その人の人間的な眼があたたか味を加えてこそ、ほんものだと思う。それなら青年たちも共鳴するに違いない。

(筆者・法政大学教授)